手漉き和紙の伝統を継承し
未来を見つめる、名匠のまなざし。

Teku-Teku 伝 SPIRIT

豊川　秀雄さん

手漉き和紙職人／やまなしの名工・市川三郷町指定無形文化財手漉和紙技術保持者

豊川手漉和紙製造／西八代郡市川三郷町市川大門1362／TEL. 055-272-0075

「地元とのつながりを大切にした、新たなチャレンジ」

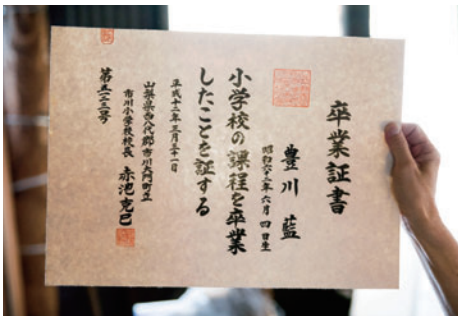
豊川手漉和紙製造の創業は江戸時代末期。6代目に当たる豊川秀雄さんは、やまなしの名工に選ばれ、市川三郷町指定無形文化財手漉和紙技術保持者にも認定されている、この道一筋45年の職人です。

「私が子どもの頃は、軒並み手漉きの紙屋。250軒くらいはあったかな。それが今、市川ではうちだけだよ」。豊川さんが和紙職人になったのは20歳の頃、当時は障子紙や書道用紙を主に作っていました。「紙を漉くおやじの姿を見ながら仕事を覚えたんだが、初めは漉いてはつぶしての繰り返し。製品になるものは作れなかった。一人前になるまでどのくらいの時間がかかったかな…とにかく手にたこができるまで必死だったよ」

大塚にんじんやトウモロコシ「甘々娘（かんかんむすめ）」といった地元の野菜を漉き込んだ紙を作るなど、新しい取り組みもしています。「こうした形で地域産業とつながりをつくることも、私の役目だと思っているからね」

「手漉きを受け継ぐ心は、今も人々の暮らしの中に。」

美しく光を通す和紙の特徴を生かし、照明器具に用いる和紙の製作も手掛けています。工房の片隅に一つのあんどんが置いてありました。「書いてあるのはこの地域に江戸時代から伝わる『市川紙漉き唄』。紙漉きの仕事の大変さが感じられる歌詞なんだよ」

和紙の文化を身近に感じる学校行事として地域の子どもたちは豊川さんのもとを訪れ、卒業証書の紙を自ら漉いています。「自分で作った卒業証書は、とても良い記念。私の子どものもあるよ」と笑顔を見せる豊川さん。工房の棚には紙を漉くときに使う各学校の型が大切に保管されていました。

地域の産業を守り確かな技を継承しようとひたむきに紙を漉く職人。市川の手漉き和紙の伝統は、千年の時の流れの中で、今もなお確実に受け継がれています。